

小弓公方が腰を落ち着けたことは、果たして関東にどのような影響を及ぼすこととなるだろうか。それが古河公方に取って代わる存在であることは勿論、与する豪族たちによる、新たな戦乱が生じることを意味する。

すでに小田原に新興勢力として伊勢氏が台頭していた。その伊勢氏と上杉氏が睨み合うなかでの、小弓公方の誕生である。

永正一六年（一五一九）八月一日、伊勢宗瑞が葦山城で没し、その子・新九郎氏綱が着々と力をつけていた。

「相模の次は武蔵国を」

その野望は既に表面化していた。そして、古河公方・足利高基は、このとき上杉よりも伊勢氏をと、依存の姿勢を示していた。自然、小弓公方は、古河公方の背後に見え隠れする伊勢氏と睨み合う関係となる。

千葉介昌胤は足利高基派である。そのため小弓公方に備える最前線に立たされていた。既に原氏が没落しており、これまでの風雅な暮らしを、千葉氏は払拭せざるを得ない。それでも攻勢なうちはよかつたが、次第に勢力を増す小弓公方に、やがては防戦一方へと追い込まれるようになった。

真里谷信保は小弓公方という名の大義名分を掲げて、千葉氏の本城にまで押し寄せるようになっていた。

「援軍なき戦いは徒勞」

この要請に憂慮した足利高基は、宍南武田一族へ援軍を行う旨を下知した。

この宍南氏と真里谷氏は、同じ房総武田氏の一族である。

当初は真里谷氏に従い足利義明誘致に協力的だった宍南氏も、やがては内輪揉めにより疎遠となった。現在の当主・宍南三河守宗信は、古河公方からの下知にも従うようになっていた。

千葉氏の本拠は佐倉城である。

ここへ兵を繰り出す真里谷勢を挟撃するよう、宍南勢は牽制する動きを取った。本腰を入れずに牽制のみに徹するのは、頼まれ戦さで、疲弊

することを恐れたためである。真里谷のすべてを恩賞となす餌さえあったなら、このとき宍南勢も大いに奮闘したことだろう。

宍南三河守宗信もまた、したたかな人物だった。

宍南宗信の動きは、狡猾にして、目障りなものだった。当初は蠅の如きものと軽視していた足利義明だったが、そのしつこさに、些か焦れてきた。招集された真里谷信保に対する、義明の言葉は厳しい。

「のう、真里谷だけでは心許ないのう」

「はあ」

「宍南は同族ゆえ、遣りづらいのか？」

「そのようなことは」

真里谷信保は歯切れの悪い返答を繰り返すのみだ。

「儂はのう。この上総国を平らかにすることこそ、関東のどこよりも急務と思うているのだ。なぜか、わかるか？」

「それは、小田原に対する備えかと」

ふんと、足利義明は鼻で応えた。

「古河公方なんぞ、飾り雛に過ぎぬのだ」

義明は覗き込むように、真里谷信保をじっと見た。

「古河公方は、飾り？」

「飾られていることにも気付かぬ。むしろ木偶である」

「傀儡師は、伊勢と？」

真里谷信保の言葉に、義明は頷いた。

「上杉の体たらく。やがて小田原の輩は、相模そして武蔵と上杉の所領を奪うこととなるう。その勢いは、やがては上総にも至る」

「両上杉をしても、武蔵国は盗られると？」

小馬鹿にした口調で義明は笑った。

「儂は小田原のそれを認めぬ。関東を統べるは足利。上杉でもない、小田原の輩でもない、それは足利家一統こそそのもの。それこそ、正統なり。古河の兄は、そのことが見えていないのだ」

たしかに、正論だ。

信保には返す言葉もない。

「このまま、兄には任せてはおけぬ」
義明は低く呻いた。

「よって儂は、正しき世の流れにすべて戻す、
ただそれだけのことで」

「は……」

真里谷信保は額に汗を滲ませた。

(傀儡のつもりが、化けおった)

十
十
十

下総の風(1)

夢酔 藤山